中谷雅彦著
『高等学校における詩学習指導の軌跡
―詩の学習指導個体史を求めて―』

詩教育で培われる学力について、今年度も様々な提言がなされた。本書もまた、我々に詩教育について考えさせてくれる。筆者の目標は一貫して「詩に親しみを覚え、どんどん読もう、作ろうという意欲」を学習者の中に育てることにある。作品と主体的に関わっていく学習者の育成を目指して、教師主導の「読解指導から脱却し、詩に親しませる鑑賞指導」のあり方を求め続けてこられた。その筆者の十九年間の成果が本書に結実している。

本書には六つの実践例が報告されており、それらは次の三期（三段階）に位置づけられている。（）内は実践名）

I 読解的指導期（『詩の鑑賞指導―多くの詩に出会わせるために―』）―I章対応
II 鑑賞指導法の模索期―読解から鑑賞へ―（『現代詩の指導―詩語の豊かさを認識させるために(1)』・『同(2)』）―II章対応
III 詩学習指導法の探索期（『現代詩の鑑賞指導―主体的な学習指導の方法を求めて―』・『ヒロシマの詩歌の鑑賞―詩歌集編集の指導を中心として―』・『秋の詩』の鑑賞―生徒の実体に応じた詩の学習指導法を求めて―）―III章対応

各実践でねらわれたことは、実践名より明らかであるが、加えて、II期には教材の開発、III期には評価法にも尽力されている。どの実践についても授業構想の視点、授業の実際、反省と課題が明確に記されており、筆者の着実な歩みを見て取ることができる。この記録から我々は、多くのことを学ぶことができるだろう。IV章「高等学校における詩学集指導の方法と課題」は、締めくくりの章となっており、十九年の詩教育指導から帰納された指摘が挙げられている。どの指摘も、その指摘が導出された背景が明確で、納得させられるものばかりである。

筆者は本書を詩教育実践のまとめとし、今後は独自の詩教育論の構築に力をそそがれるようである。期待したい。

（A5判　一六九ページ　一九九六年三月　渓水社　三〇九〇円）
（田口裕美子）